

## ハイデッガーにおける自由の把握

### —『根拠の本質について』を中心にして—

西 村 誠

実存 (die Existenz) という語は、カントなどでは一般に或るもののが現実的にあるという程のことを意味している。だがこの語は現代では特に人間のあり方を指す語として受け取られている。実存哲学的な思想家達がこの語を特に人間だけに限定して用いるのは、この語によって、他の存在者とは異なった人間のあり方を考えているからである。伝統的な人間理解に従えば、人間は理性的存在者として捉えられ、その点に他の存在者とは異なった長所が認められている。だが実存哲学的な思想家達は、死とか、不安とか、罪とか、現実に生きている人間の切実な問題に眼を向け、そして各自が自由な決意によって自己の本質を創造するところに人間のあり方を見い出している。

ハイデッガーの思想を「実存主義」、ないしは「実存哲学」として把握することはできないとしても、彼もまた存在の意味への問い合わせ初めて提起された『存在と時間』という著作で、人間を自由な決意によって自己自身を選択する存在者として捉えている。彼は後になって実存を「存在の明るみに立つこと」という意味で「脱目的的実存」(die Entzweckung) として捉えるのであるが、この著作では実存とは必ずしもそのようなことを意味していない。

それに対して、『存在と時間』から二年後に出版された『根拠の本質について』という著作では、自由と存在との関連が現存在在

の超越の側から呈示されている。それ故にここでは、この後者の著作における彼の自由の把握について考察することにする。

この著作は序論と見做される箇所とその他の三つの部分から構成されている。そしてそのうちの最後の部分で、根拠ということが現存在の自由を基礎にして究明されている。だが一体何故に現存在の自由を基礎にして、根拠の本質が究明されているのであるか。この著作の内容に従えば、次の三つの理由が考えられる。一つには、彼が根拠の問題を超越の問題として捉えたということである。根拠の問題のこのような把握は、真理が根拠への内的な関連を有していることの指摘と、真理の三つの段階に注目することを介して行なわれている。ハイデッガーにとって、真理は命題の真理に尽きるものではない。命題の真理は「存在者の前述語的な顕示性」としての存在的真理に根づいており、またこの存在的真理は「存在の露顯性」としての存在論的真理によって可能となり、しかもこの後者の二つの真理は「存在と存在者との区別」へのそれらの関連に基づいて本質的に相関していると考えられている。彼はこの存在論的差異の根拠を現存在の超越として捉えることによって、超越が根拠の本質の究明の場であることを指示するのである。

二つには、彼が現存在のこの超越を「世界への超出」として捉え、また世界は現存在の「自己のために」ということの投企によって生起させられると考えたことである。超越という語の普通の理解に従えば、超越は主觀から客觀へ越えて行くこととして、あるいは制約されたものから無制約的なものへ越えて行くこととして解されるであろう。だが「存在と存在者との区別」の根拠が超越として考えられていることからも窺われるよう、ハイデ

ッガーにおいては超越がそこへと向って行なわれる行先は、如何なる存在者でもない。むしろ彼は存在者が全体的に世界へと向つて越えられるというような事態を超越として解しており、またそれを「世界一内一存在」として規定している。

彼が現存在の自由を基礎にして根拠の本質を究明するに到つたもう一つの理由としては、先に世界との関連で示された「ために」ということ」(das Unwillen)がそれを形成し投企するものに関する意志(der Wille)として、また自由として把握されていることを挙げ得るであろう。超越という地平で捉えられているこの自由は、超越が世界へと存在者を全体的に越えて行くことを意味しているが故に、存在者と関わる意志作用の性格と見做されはならないであろう。むしろハイデッガーにおいては、「ために」ということを投企するという仕方で、自由が世界を生起させるのであり、また「世界への超出」が自由そのものなのである。

根拠の本質の究明は、根拠へのこの自由の根源的な関連の究明として行なわれている。すなわちハイデッガーはこの関連を「根拠づけ」と名づけ、根拠づけの三つの仕方として「創設」としての根拠づけ」と「地盤を受け取ることとしての根拠づけ」と「基礎づけ」としての根拠づけ」を挙げる。また根拠とはこの各々の根拠づけの分散に従つて「可能性、地盤、証」であるとされ、これら根拠づけの「超越的に発現する分散」が根拠の本質であると考えられている。そして自由は、この超越的な分散を根拠づける統一として、「根拠の根拠」であるとされている。ここでこれらの根拠づけの内容を論述することは出来ないが、この著作で述べられてのことから考察すれば、各々「ために」ということ」の投企、被投性、存在理解ということによって特徴づけ得るであろう。

さて多くの場合、自由は人間の行為や意志決定に関して取り上げられる。そして行動の自由とか、選択の自由とか、倫理的自由とかが問題とされる。だがハイデッガーはこの著作で、理論的な態度とか、実践的な態度とかの区別以前に、自由を現存在の「世界一内一存在」という根本構造の中核に位置づけている。しかも超越が「存在者の顯示性」を可能にするものとして、すなわち「存在の露頭性」に関わるものとして捉えられているが故に、自由もまた超越として「存在の露頭性」との関わりのうちで把握されている。存在者と関わる如何なる態度も「存在の露頭性」に基づいて可能になるとすれば、いわばこの超越的な自由とも言うべきことが存在者とのすべての関わりの基礎に存していると考えられる。だがハイデッガーの思惟の中心課題である「存在とは何であるか」という問い合わせる時、この著作での彼の自由の把握に関して一つの問題が浮び上ってくる。ハイデッガーはこの問い合わせ、「そのうちで存在一般というようなものが理解可能になる地平」への問い合わせ、換言すれば存在理解の可能性への問い合わせとして把握している。従つて現存在の自由は、それが自らのうちに存在理解ということを含んでいる限り、存在理解の可能性の説明によって一層根本的に捉えられるようになり、また存在と自由との関連もその関連の全体の根底から把握されるようになると考えられる。我々はその時にこそ、彼における自由を十全な姿で捉えることができるであろう。だがこの著作では存在理解の可能性の究明がなされていず、また自由が「根拠の根拠」として捉えられることによって、現存在の自由が一切の存在者の終極の根拠となるように見える。ここに、彼の自由の把握に関して究明されるべき一つの問題があると思われる。